シーボルト的、ゲーテ的、万有科学者的存在
—長崎高商教授武藤長蔵の百学連環—

谷　澤　　毅

目次

はじめに
Ⅰ、武藤長蔵の人物像
（1）履歴
（2）書籍とのかかわり
（3）交友関係
Ⅱ、研究内容
（1）研究領域
（2）研究の特徴　—　ムトウイズム
Ⅲ、博学者の系譜
（1）南方熊楠
（2）金関丈夫
（3）林達夫
Ⅳ、博物学、民間学と武藤長蔵
（1）博物学
（2）民間学
（3）小括　—　博物学、民間学と武藤長蔵
Ⅴ、教育者としての武藤　—　結びにかえて

はじめに

本稿では、かつて長崎高等商業学校（現長崎大学経済学部）で教授を務めた武藤長蔵の学問世界を概観してみることにしたい。武藤長蔵は、地元長崎では『長崎ぶらぶら節』（なかにし礼）で一躍有名になった古賀十二郎、それに県立長崎図書館の初代館長を勤めた永山時英とともに「長崎学の三羽烏」の一人として郷土史研究者として取り上げられることが多い。しかし、彼の学問的業績、知的好奇心は長崎学の範囲に収まらなかった。むろん長崎学は郷土史の範囲を超えるいわば総合学であり、幅広い知識が必要とされる学問領域であるが、当初武藤の学問の土台は経済学･商業学にあった。やがて彼の研究と興味は人文･社会科学の各分野に広く及ぶようになり、一部自然科学に言及する論考も生み出されるようになった。しかし、なによりも彼の学問を特徴付けるのは、膨大な数の文献･資料に基づく緻密な考証であるといえる。武藤が博学といわれる所以の一つはそこにある。その学問のスタイルが独特であったがゆえ、武藤の学問世界は、しばしば「ムトウイズム」（後述）という言葉で表され、これまでその独自性が強調されてきた。

とはいえ、武藤の学問は決して孤立しているわけではない。後に指摘するように、彼の研究成果は、表現･論述面での独特の「癖」を持つものの、彼の基本的な発想法や論旨の立て方は、ほぼ彼と同時代に生きた博学者にも見出すことができるものであった。以下では武藤の学問世界を俯瞰するとともに、彼を近代日本の博学といわれた学者の系譜に位置づけることを試みてみたい。その際、彼の学問の特徴の一端に博物学と民間学の側面から光を当てることにしたい。

ここで、本稿のタイトルについて一言述べておこう。「シーボルト的、ゲーテ的、万有科学者的存在」とは、武藤の広い学識を評してかつて用いられた表現である。[1)]「シーボルト」、「ゲーテ」ともに、それぞれ単なる医者、作家の枠を超えた極めてスケールの大きな学者であった。「万有」とはす

べての物事を意味するから、「万有科学」とはあらゆること、つまり百科全書的に広く物事を考察の対象とする学問のこと、すなわち後で述べるように広義の博物学を指すと見なすことができよう。以下で触れるように武藤には狭い意味での博物学を題材とした研究はなかったが、博物学的方法、精神の持ち主であった。最後に副題に用いた百学連環という言葉であるが、筆者は、2007年に東京·印刷博物館で開催された展覧会「百科事典と動物図譜の饗宴」[2] を観覧して大変強い感銘を受けた。そして、西周 ― 彼も博学であった ― がエンサイクロペディアを「百学連環」と訳していたことを知った。百学連環という言葉こそ、網の目状に広がる武藤長蔵をはじめ博識を謳われた学者たちの知的世界を表わすうえでふさわしいのではないか。このように考えてここに用いることにした。

Ⅰ、武藤長蔵の人物像

武藤長蔵は「長崎学の三羽烏」の一人として知られるとはいえ、彼がどのような人物であったかは、活躍の場であった長崎でもそれほど良くは知られていないのではないかと思われる。知られているとすれば、おそらくその多くは彼の学問・研究についてではなく、学者として往々にしてありがちな、世間の常識とかけ離れた「奇人」としてのエピソードであろう。彼の学問については後述するとして、ここでは、まず武藤の履歴と交友関係を中心に彼の人物像について簡単に確認しておきたい。

（1）履歴

武藤の生涯については、彼の在職30周年を記念する論文集に、彼自身の手でまとめられたと思われる年譜が掲載されている。[3] それによると、武藤は、明治14年６月９日に愛知県尾張国海東郡津島町（現津島市）に生れた。名古屋の西、三重県との県境に近い地域である。名古屋商業学校の予科を経て、明治30年に名古屋商業学校本科を卒業、翌31年に東京高等商

業学校（現一橋大学）に入学。東京高商では、本科を卒業したのち、専攻部に進み、明治38年７月７日に同校専攻部の貿易科を卒業した。卒業論文の指導教授は関一、テーマは「日本精糖政策」であった。関は後に大阪市長になり、大阪の近代化に貢献した市長として知られるようになる。ほかにも福田徳三や横井時冬などの薫陶を受けた。

卒業後、武藤はまず上海にあった東亜同文書院に教師として採用される。そこで、経済原論や経済政策、商業通論、外国実践、貨幣論などの科目を担当したという。しかし、そこでの教職期間は明治38年９月から翌年の12月までの１年と３ヶ月にとどまり、明治40年１月10日、25歳で長崎高等商業学校教授に就任。その後30年間、昭和11年に55歳で定年退官するまで研究と教育に従事し、退官とともに名誉教授の称号を得る。その後も講師の資格で教壇に立ち続け、昭和17年に61歳で永眠した。[4)]

長崎高商に着任して４年後の明治44年から大正４年まで、武藤は３年半をかけてドイツ、イギリス、アメリカに留学した。年譜には、彼が師事し、聴講した学者の名前が挙げられているが、そこには、シュモーラーやゾンバルト、シュルツ・ゲファーニッツ、ベロウ、アシュレーなど、歴史的色彩の強い研究者が多く含まれていることに注目される。帰国後彼の研究は大きな広がりを見せ、狭い意味での経済学や商業学を超えて歴史を軸にその周辺領域、人文科学、社会科学の諸領域へと及んでいくようになり、書籍を重視した博策の姿勢も一層強化されていった。それだけに留学の成果は大きなものがあったといえるだろう。武藤の学問を進化させたヨーロッパでの何らかの出来事、経験といったものがあったのだろうか。留学先での武藤の研究内容や生活に関する研究の進展が待たれるところである。

定年退官後の昭和14年、武藤は慶應義塾大学から経済学博士の学位を授与された。学位の対象となった研究は、彼の主著である『日英交通史之研究』であった。これは彼の主著として昭和12年に初版が出版された。論文の審査に当たったのは、慶應義塾大学経済学部の高橋誠一郎と野村兼太郎であった。最初、武藤の博士論文は文学部の幸田成友が審査する予定であっ

たが、最終的には経済学部の高橋、野村両教授が担当となり、それゆえに武藤が得た学位は希望していた文学博士ではなく、経済学博士になったといういきさつがあったらしい。[5] 幸田成友は経済史研究者として日欧通交史に関する業績があり、[6] 武藤とは研究領域が重なるところがあった。なお、高橋誠一郎は著名な経済学史の学者として後に慶應義塾大学の塾長となる一方、浮世絵のコレクターとしても知られ、文献史的、考証学的な学問的手法の持ち主であった。[7] 野村兼太郎は、経済史学者として西洋と日本双方の歴史を幅広く研究しており、各民族の個性や特殊性といった個別的な事象からから眼を背けるべきではないとする経済史観の持ち主であった。おそらく野村は、徹底的に事実を詮索しようとする武藤の学風の理解者であったと考えられる。[8]

（2）書籍とのかかわり

さて、武藤の人物像を見ていくうえで無視することができないのは、彼の書痴としての側面である。武藤の学問を特徴付けていた事柄の一つに、書籍･資料に対する執念ともいえるこだわりがあったことは、よく知られている。資料を収集していく上で、武藤はほとんど家計のことを考慮せず、家族に迷惑をかけていた。「経済学者の経済知らず」と家族からこぼされていたという。[9] 経済を主な研究の対象としていたとはいえ、武藤の学問的な関心は、あくまでも書籍･資料を通じて触発され植えつけられていたのであろう。

武藤の没後、彼のもとに残されたコレクションは、雑誌、小冊子を含む書籍が約１万点、書画や陶器などの資料が200点に達していた。それらは現在長崎大学経済学部の図書館において「武藤文庫」として保存されている。武藤文庫に関しては、目録が刊行されているほか、現在ではインターネットを通じてその内容を知ることができるので、武藤が収集した資料については、ここでは立ち入らない。[10]

ほかの側面から武藤と書籍とのかかわりを見ておくと、彼の研究の特徴

の一つに、研究に際して利用した文献の入手のいきさつを非常に頻繁に語るということが挙げられる。ある文献を、いつどこでどのようないきさつで入手したか、また誰の手を煩わせて誰が所蔵しているオリジナルを見ることができたか、などといったことが頻繁に語られるのである。また論文にちりばめられた、そうした書物にまつわるエピソードからは、彼自らが勤務先の図書館の蔵書の充実に努めていたことも見て取ることができる。おそらく長崎大学経済学部の図書館には、武藤が注文して納めた貴重な文献が、武藤文庫以外にも数多く保存されているのではないかと考えられる。

書籍を愛し、文献を通じた研究を数多く残した武藤の学風は、彼の次の言葉からもうかがうことができるだろう。「人もしある学者の業績を評せんとするときは、その人の著作・論文等によることもちろんであるが、その人が収集した文書・資料によって、彼が研究しまた利用せんとしたことを、あわせて考慮すべきである」。[11] 武藤の知的好奇心の広がりは、彼が公表した研究成果のみならず、残された蔵書からも垣間見ることができるのである。

(3) 交友関係

ところで武藤のように書物を愛し、その収集に時間と労力の多くをつぎ込む人物は、えてして書物だけの世界に惑溺してしまうことから、どちらかといえば世間嫌いで非社交的となるのが普通である。ところが武藤は無類の社交家として知られ、彼と交友関係にあった人物のなかには多くの著名人が含まれていた。高等商業学校の教授としてアカデミズムの世界の多くの学者と接していたことはいうまでもない。例えば、村上直次郎、黒板勝美、板沢武雄、岩生成一などの歴史学者、小泉信三、内田銀蔵、河上肇などの経済学者、経済史学者がそうである。ここでは、寺崎勇夫の調査をもとに武藤と交友関係にあった有名人、歴史･経済系以外の著名な学者を幾名か挙げてみよう。[12]

まず、よく知られているのは斎藤茂吉との関係であろう。茂吉は大正6

年から３年半、長崎医学専門学校の教授として長崎に滞在した。その間武藤とは、お互い本がビブリオフィルということで意気投合することになり、両者の交流は、茂吉が長崎を離れたあとも続いていく。武藤に対する思いが込められた歌を茂吉が作ることもあり、例えば、武藤の訃報に接した茂吉は、「かなしみて　君を偲べば　長崎の　海の潮の　鳴りて聞こゆる」という挽歌をささげている。

森鴎外との関係もあった。それについては、武藤自身が「森鴎外先生との対談」という文章を残している。[13] マルクス『資本論』にあるダンテからの引用が原典と異なっているということに、鴎外のほか武藤も気づいていたのであった。[14] また、芥川龍之介が大正８年に菊池寛と長崎にやってきたときには、武藤が案内役を勤めた。[15]

歴史･経済以外の学者との交流も盛んであった。例えば言語学者の新村出は南蛮趣味の持ち主という点で武藤との共通点があったほか、言語学者として武藤の「銀行」という言葉の来歴に関する研究に注目している。[16] 考古学者の浜田耕作とは兄の武藤長平を通じて知り合いとなったと、武藤は浜田に対する追悼文の中で述べている。そこではまた、武藤の歴史に対する興味に影響を与えた一人に浜田がいたことが想起されている。英文学者の市河三喜とは、武藤のイギリス留学時代に関係が生まれた。武藤と市河、それに浜田はほぼ同じ頃にイギリスに留学時代していたので、しばしば三人で大英博物館に落ち合って午餐を館内の喫茶店で共にしたことが、前記の追悼文で回想されている。[17]

武藤の人脈は政界にも及んでいた。後に首相となる広田弘毅は外交官であった当時、オランダに赴任する前にわざわざ長崎の武藤を訪ねて、オランダ史に関する知識を仕入れた。[18] 一方の武藤は、外交問題に関心を持ち、それがやがて彼の主著となる『日英交通史之研究』にも生かされるが、おそらく広田からも国際法など法学面の知識を仕入れていたと考えられる。[19]

さて、武藤が高等商業学校の教授として多くのアカデミズムの世界の学者と接していたことは繰り返すまでもないだろう。ここでは、学者として

の彼の交友関係が、さらにアカデミズムの世界には属していない在野の学者(民間学者)に及んでいたことに注目したい。その筆頭に古賀十二郎との関係を挙げよう。長崎の歴史に関する百科全書的知識の持ち主である古賀の学者としての風貌は、小説や映画を通じて広く知られるようになった。また、近年刊行された古賀の評伝では、古賀十二郎と武藤長蔵との関係も所々描かれており、[20] 武藤と古賀それに永山時英の「長崎学の三羽烏」をはじめ、長崎学に関心を持つ人々との交友関係の一端が、そこからは窺われる。美術のコレクターであった永見徳太郎との交友も、そこに含めてよいであろう。[21] 長崎学を通じた人的なネットワークのなかで、おそらく武藤は多くの在野の学者と交流があったと推測される。

民間学者との交流のなかでも特に注目されるのは、大槻如電の存在である。民間学の大御所であり、博識ゆえに一目置かれる存在であった如電は、在野の知のネットワークの一大結節点とも言うべき存在であった。[22] 武藤は、1934年の如電来崎の折に食事を共にし、記念撮影を行なった。[23] これはまことに注目すべき会食であったといえるであろう。永山や古賀、さらには茂吉をも交えたこれら博学者の間でいったいどのような会話が交わされたのか知りたいと思うのは、筆者だけではないはずである。また武藤の蔵書には、如電の著書が幾つか含まれていた。[24] 武藤の知的関心はアカデミズムの世界を超え、彼の知的ネットワークは在野の学者たちに及んでいたのである。

『明治事物起源』で有名な石井研堂も、武藤と交流のあった民間の知の巨人の一人である。例えば、同書の第10編「金融商業部」の「銀行の名」の項目では、筆頭に武藤の名が置かれているほか、[25] 石井が長崎に旅行したときに（大正11年)、武藤は古賀十二郎とともに石井の宿舎を訪問している。その際武藤は、石井がシーボルトの落とし胤であるとのうわさに関して石井にその真偽の程を問うたことがあったらしい。[26] ほかにも柳田國男、徳富蘇峰といったスケールの大きな民間学者との関係があった。

このように武藤の交友関係は、アカデミズムの世界を超えて在野の世界

にまで広がっていた。これは並々ならぬ好奇心、向学心が彼にあればこそ実現しえたことであろう。武藤はアカデミズムの学問世界と在野の学問世界との接点にいた。双方の知のネットワークを結び付ける結節点となる人物の一人に彼がいたといえるのではないか。これは武藤長蔵の学問の特徴、性格を彼が生きた時代の学問的潮流のなかで見ていく際に、無視することのできない重要な事柄であるように考えられる。

II、研究内容

（1）研究領域

武藤は、長崎学の発展に貢献した郷土史研究の大家という顔を一面では持つが、彼の本来の研究分野は、初期の論文や東亜同文書院における授業科目を見る限りでは、政策論を主体とした経済･商業にあったように思われる。とりわけ鉄道に関しては多くの論文が書かれ、彼の研究の中心的な部分をなしていた。こうした彼の学問的な関心が、やがて人文･社会の諸事象にまつわる各種の歴史的な研究へと広がっていき、百学連環をなすともいえる可能な限りの文献･資料を参照して特定の事柄を実証していくという武藤独特の研究スタイルを確立していくのである。

先に見た武藤の履歴が掲載されている彼の在職30周年を記念する論文集にはまた、武藤自身が作成した著作目録が掲げられている。この目録に採用されている研究区分に従えば、武藤の研究領域は、おおよそ以下の領域に及んでいた。[27)]

1、鉄道交通の経済的、法律的および歴史的研究

2、経済史、経済学史およびその他の学術史上の研究

・アーノルド・トインビー

・ジョサイア・チャイルド

・アダム・スミス

・ジョン・スチュアート・ミル

・マルサス及び人口論

・Ｈ．Ｃ．ケリー

・Ｗ．Ｊ．アシュレー

・トマス・アクィナス

・Ｉ．カント

３、語源及び訳語の研究

・銀行なる名辞の由来

・邦語の植民なる名辞の由来

・その他の語源及び訳語

４、日蘭交通史及び蘭書、蘭学の研究

・蘭書

・シーボルト

・ツンベルク（ツュンベリー）

・電気

５、日葡交通史の研究（キリシタン史及び日西交通史を含む）

６、日露交通史

７、日支交通史及び支那通商史の研究

８、日英交通史の研究

９、都市研究

10、教育とくに商業教育

11、工業政策及び社会政策上の研究

12、長崎及び長崎県、郷土史の研究

13、旅行記

14、ゲーテ及びシラー考

15、雑

16、史学講演

目録に掲載されている著作は、著書が６編（改訂版を含む）、論文そのほかが100編以上に及ぶ。[28] なお、上記区分のうち、15の「雑」には随

筆や回想が含まれ、16はすべて「史学会」での研究報告である。これら武藤の数多くの研究成果は、また時間軸に従って配列することもできよう。先にも指摘したように、武藤の研究は留学の前と後で大きな変化が見られる。経済や商業を題材とした比較的オーソドックスな研究から、個別的な事実を大量の文献、資料を用いて歴史にさかのぼって綿密に考証するという武藤独特の研究へと移っていったのであった。[29)]

(2) 研究の特徴 ― ムトウイズム

では、武藤独特の学問の特徴・性格とはどのようなものであったのだろうか。

武藤長蔵の学風は、しばしば「ムトウイズム」という言葉で表される。この言葉を最初に用いたのは、おそらく小泉信三であろう。小泉は、武藤への追悼文で、[30)]「私はひそかに戯れにムトウイズムという述語を考えてみた」と述べているが、のちに武藤の独特の学問世界を指す言葉としてよく利用されることになる。小泉信三によればムトウイズムとは、誠実無比なる篤学、次いで詮索癖・好事癖、さらに道草癖などからなるとされる。

武藤の研究は、学問的に誠実であるがゆえに説明が煩瑣である。普通の研究者であれば省略するような瑣末な事柄であっても武藤の好奇心のアンテナに引っかかれば、細部もおろそかにされず、くどいほどの考証が続く。資料に依拠する際には資料に忠実であろうとするがゆえ、長文の資料をそのまま、外国語の場合であっても原文のまま転載されることがしばし見られる。それゆえに何ページにも渡って欧文や漢文が続くことがある。そして詮索、好事癖が発揮される際には、それが高じて可能な限りの文献・資料の利用と参考文献の列挙がなされる。それも正確であることを旨とするので繰り返しをいとわず略すことをしない。しかも道草が多い。本論からはずれてわき道に入り込んでしまい、話の繋がりが読み手に見えなくなってしまうことが多々ある。つまり、学問的に誠実であろうとするあまり、武藤の論文は、読み手からすればかなり読みにくいのである。こうした武

藤の研究スタイル、学風は、彼と同時代の人文･社会学界の中でも独特の風采を放つものであったといってよいだろう。

こうしたムトウイズムが普段の人間関係、日常会話の場で発揮されたら、これははた迷惑な話である。ところが武藤は、その点をあまり考慮しなかった。誰もが自分と同じ興味を抱いていると確信していた武藤は、関心のある事柄を延々と話し続けた。それに辟易する人も少なからずいたはずである。武藤の話しぶりに関しては、小泉信三がこの点を活写している。それを引用しよう。「武藤君の話題と話し振りは、友人の誰でもが承知しているように、武藤一流のものであった。話題は常に本のことである。「君、面白いじゃないか」というのは、本の表題、刊行年月、出版の場所、様様の版本、それ等における表題の相違、内容文言における出入、学者がそれに気附いている事実の有無に関することで、話はそれからそれへと続いてつきない。更に武藤君の話は事実から憶測の境へも進む。何某が某所にいた時、某書はすでに出版せられていたから、何某が云云の説をなした時、彼は恐らくこの書を読んでいたものと想像される。そうして彼の見た本は、あるいはこの本（エキセムプラアル）ではなかったろうか。「君はどう思う」などという。「ところがここに面白いことはね」と更に続き、話題は枝から枝へと岐れて行くこともある。聴いていて少しそれたな、と思っても私にはとめることができない」。[31)]

ムトウイズムに由来するエピソードを彼は数多く残した。しかし、それは武藤が純粋な好奇心をもっていたからこそ、周囲の人々との間で生じた齟齬であったといえはしないか。武藤には、他の人も自分と同じような好奇心を抱いていると信じて疑わない素朴な性善説に立つ信頼とでもいえるものがあった。だからこそ武藤は「変わっている」とはいえ、多くの人に受け入れられ、愛されたのであるといえよう。

次に、武藤の幾つかの研究成果を素材として、彼の研究の特徴･性格を具体的に探ってみることにしたい。最初に取り上げるのは、彼の主著であり博士論文授与の対象ともなった『日英交通史之研究』（内外出版印刷、

1937年）である。これは、昭和16年に刊行された改訂増補第２版で約850ページに及ぶ大著であり、大きく分けて日英関係の展開に関する事細かな文献の博策に基づく事実関係の確認と、史料・文献の編纂・解題とからなる。目次を見ると、第１編「日英交通史概観」で１～109ページ、第２編「日英交通史料」で111～581ページ、第３編「初期日英交通史の重要文献」で584～659ページがそれぞれ費やされ、全体の850ページうちの約550ページが史料や文献の解題、紹介に当てられていることがわかる。これは、研究書として破格の構成と内容を持つものといえる。

最初の部分だけ、かいつまんで内容を確認しておこう。まず第１編第１章では、わずか２ページにも満たない紙幅の中で日英交通の特徴が示される。すなわち、日葡、日西交通の中心には宗教があったのに対して日蘭交通の中心には経済があった。いっぽう、日英交通は、最初関係の中心が経済にあったが、その経済が原因となって英国は日本を引き上げた。しかし後年、1637年に再度英国が通商を願い出たが、そのときは宗教的理由により鎖国体制下にあった日本からそれが拒否された。導入部はこれだけである。恐らく現在の研究であれば、例えば、大航海時代や世界経済の形成などといった枠組みを用いて時代背景が語られ、研究動向がフォローされて研究史のなかでの本研究の位置づけがなされてから本論へと進んでいくことであろう。だが、武藤はそのようなことはせずにすぐ以下の章で具体的な考証に取り掛かる。

第２章では日英交通の起源を探っている。もちろん記録のない接触は調べようがないので、武藤は幾多の文献を照らし合わせながら、記録に残る限りでの最初期の日英間の接触に関する事実を探し出そうとする。ここでの考証からは、彼の関心の在り処が見えてくる。すなわち、彼にとって興味があるのは、日本に関するイギリス側の最も古い記録(記事)は何か、日本に行こうとした、もしくは実際に渡来した最初の英国人は誰か、最も早く日本に到達した英国船はなにか、そしてこれらの事実に一番早く気づいていたのは誰か、といった問題である。時代状況や時代背景といった大き

な問題ではなく、ムトウイズムから生じた細かな書誌学的な事実をめぐる問題が、この後も次々に取り上げられていくのである。

第３章では、日蘭交流の嚆矢となった有名なリーフデ号が扱われる。ここではまず、リーフデ号が属していた船団の各船の名前が注目されている。その船団には、「De Liefde：慈愛」のほか、「De Hoope：希望」、「Het Cheloove:信仰」と名づけられた船が属していた。これらの船名を知った武藤は、それらが新約聖書コリント前書つまり「コリント人への第１の手紙」第13章にある「信・望・愛」から取ったものであることを直感したという。[32]。これはすばらしい直観力である。聖書に関しても、並々ならぬ知識を持っていたことがうかがわれる。武藤は若い時、内村鑑三に師事していたという。彼の聖書に関する知識はそのときに培われたのかもしれない。[33] また、同章では、リーフデ号の貨狄像として知られる有名なエラスムスの装飾像（フィギュアヘッド）に関する考証がなされている。このエラスムス像は、リーフデ号の船首像として知られてきたが、武藤は、これが船首像ではなく船尾像であるということを、様々な文献から裏付けていく。

こうして『日英交通史の研究』第１編では、以上一部だけ紹介したような様々な考証が盛り込まれていく。第１編は概論として、本研究のいわば骨格の部分を形づくるものであるとはいえ、その内容のほとんどは、書誌学的な考証に基づく細かい事実の確認である。それに続く450ページ以上に渡る第２編は文献解題、史料の紹介だ。さらにこの大著には結論のある章や編があるとはいえ、本研究全体の結論に相当する部分を欠いている。まさに破格の研究であるといえる。本書の改訂版は、経済史の専門誌である『社会経済史学』の書評で取り上げられ、史料編纂などに関してかなり好意的な評価が下されているが、全体としての秩序と体系とを欠いているとの欠点も指摘されている。[34] そのような評価はあって当然であろう。しかも、 ― これは本書以外の武藤の著作に特に当てはまることだが ― 訂正されるべきミスがそのまま残されている。ムトウイズムが発

揮された文章はくどくて読みにくい。今日であれば、本書ははたして学位論文として通用するであろうか。文献の博索を中心とする内容はともかく、形式面で問題ありとされてしまうかもしれない。ともあれ本書は高橋誠一郎と野村兼太郎といった「多識」の研究者に審査され、武藤には経済学の博士号が授与されたのであった。

そのほかの研究業績からも、かいつまんで武藤の研究によって明らかにされた成果を見ておく。すると、こうした作業を通じて見えてくるのは、やはり書誌的に明らかにし、発見しようとする事実の考証の過程にこそ彼の研究の重心が置かれているということである。

例えば、武藤の代表的な研究の一つに「鉄道に関する知識のわが国に伝わりし門戸としての長崎」がある。[35] この研究で彼は、1872年に新橋・横浜間に鉄道が開通する以前の慶応元年に、長崎でデモンストレーションのために線路が敷かれ、汽車が走っていたということを明らかにした。一般に学術論文であれば、個別的な事実を扱う場合であっても、その事実を取り囲む諸状況が説明されて全体のなかでの位置づけが図られるのが普通であろう。例えば、交通史の問題であれば、扱われる事実がどのような社会的文脈のなかに位置づけられ、どのような研究の流れのなかでこの事実が明らかにされるのか。こうした点を確認することにより、扱われる事実の客観性が確保され、問題として取り上げるべき価値が定められていくことに、著者は留意するはずである。ところが武藤は、こうした諸点に注意を払うことがきわめて少ない。この武藤の代表作においても、明らかにされるのは、新橋・横浜間に鉄道が開通する前に長崎で汽車が走っていたという事実なのであり、それを実証するために内外の幾多の文献を用いて徹底的な考証が繰り広げられるのである。若い頃の武藤の研究の中心にあったのは、鉄道研究であり、例えば、交通政策の面から満鉄を題材としたオーソドックスな論文を発表していた。しかしやがて彼は、あまたの資料・文献を駆使して事実の考証に終始するムトウイズムの横溢した研究を次々に発表していくことになる。こうした側面の研究の代表作に、大正７年から

９年にかけての「銀行」という言葉の由来に関する長大な考証が挙げられる。[36]

書誌的な面での武藤のこだわりは、「カント著『人生論』とツウンベルグの長崎出島滞在記」という論文からもうかがうことができる。[37] この論文の趣旨は、カントが『人生論』（アンソロポロジー）で挙げている「蘭人の眼玉の大なる事を日本の児が叫ぶ」という記事の出典は何か、ということを明らかにすることにある。武藤によれば、一般にその出典はケンペル(ケンプファー)とされてきたという。しかし、実際はケンペルではなく、それはツンベルク(ツュンベリー)であると述べる。その考証のために武藤はツンベルクの『日本滞在記』を参照しながら自らの説を裏付けていくのであるが、利用するのはスウェーデン語の原本だけではない。同書のドイツ語訳、英語訳、フランス語訳、さらに日本語訳を互いに照らし合わせて問題の記述箇所を念入りに確認していくのである。そして日本語訳に関して武藤は、これが長崎の薬学者藤川次郎が訳したもので、その原稿の保有者が古賀十二郎であることを明記し、資料の来歴・所蔵をはっきりさせてムトウイズムを発揮させている。こうして武藤は、ツンベルグの記事の中に「オランダ人を見て子供たちが大目と叫んだ」と書かれていることを証明していくのである。[38] この論文は、タイトルにカントを含むからといって、難解なカント哲学が議論されるのではない、上述の一つの事実を明らかにする、そのために武藤は言語の違いをいとわず、持てる力の限りを注ぎ込もうとしたのである。

「スミスの名、その生涯、およびその学説等を早く我が国に伝えたる蘭文経済書」という論文[39] でも、武藤が開陳する問題意識は同じだ。ここで特にアダム・スミスの経済学説、理論が検討されているわけではない。彼が関心を抱いているのは、あくまでも「スミスの学説を最も早く日本に伝えたのはどの本か」という一つの事実に尽きる。その事実を明らかにするために、彼は得られる限りの資料を使って考証を繰り広げる。長いタイトルを持つ論文であるが、「シーボルトの大著「日本」に掲ぐる温泉嶽

(Wunzentake) の絵は谷文晁画くところの雲仙岳によりしものなることの考証」[40] ともなれば、論文で明らかにしたいことはタイトルに含められているので、改めて説明するまでもないだろう。

これら一連の武藤の論文で考証されている事柄は、あるいはささやかな、歴史・理論の大局に関わることのない瑣末なことに過ぎないと考えることもできよう。しかし武藤は、ともすれば重箱の隅をつつくような細かい事実の確定のために彼の博識、とりわけ文献学的な知識を総動員してその事実を明らかにしようとするのである。

山田憲太郎によれば、武藤は「年齢とともに異常な書誌学的研究を高進させ」たという。その「研究はあまりにも微に入り細をうがち、引用、脚注、追記、再注、補記、補論とあって、立論の本旨がどこにあるのかを疑わせる程である。また時、人、所と資(史)料については重ね重ね記すことをいとわないで、くどいくらいまで自分の知っていることを語り、そして記し、普通の常識では判断に苦しむ名(迷)文である」。[41]

武藤に見られるこうした独善的とも、あるいは天真爛漫とも言える他人への信頼に基づく研究のスタイルは、まさに武藤ならではの彼独特の学風をかたちづくるものであった。ムトウイズムという言葉が好んで用いられるゆえんである。

改めて武藤の学問の特徴について確認しておけば、それは大量の文献資料の利用と徹底的な考証に基づく個別的な事実の確定にあるといえる。そこに彼の書籍を中心とした圧倒的ともいえる博識が盛り込まれ、場合によっては些細とも言える事実の確定が行なわれる。神は細部に宿り給うのである。

では、もし、こうした個別的な事実をこそ愛惜するがごとく徹底的に考証して確定し、そうした事実を蓄積していった武藤の研究を学問史のなかに位置づけるとすれば、果たして学問の世界のどのような系譜に当てはめることができるであろうか。博学多識、博引傍証、詮索癖きわめて旺盛な武藤長蔵の学問世界（ムトウイズム）は、たしかに独自のものである。し

かし、学問の世界のなかで彼の研究は、決して孤立してしまっているわけではない。武藤の好奇心は、経済学や商学、歴史学などといった一つの専門分野に収まるものではなかった。知的地平の広がりといった面のみならず学問的手法といった面から彼の研究の特徴を探るためには、細分化され緻密化した近代的な学問分野をひとまず離れてみることも、決して無意味ではないと考えられる。[42] そこで以下では、いわば試論として、武藤の本来の学問のフィールドである経済や歴史をひとまず離れて、彼の研究を広く学問世界の中に位置づけるための一つの視角を提示してみることにしたい。そのために二つのアプローチを採用する。一つは、いわゆる博学者の系譜に彼を位置づけること。そのために、ここでは著名な博学者のプロフィールを探ると共に、研究面から武藤との比較を試みる。もう一つは武藤の学問的な特徴（ムトウイズム）を理解するために、広範な学問世界の中で彼の研究と類似した手法が見られる学問分野を探ってみることにする。やや唐突ではあるが、筆者は武藤の学問の特徴を理解するうえで、民間学や博物学と呼ばれる学問分野が、何がしかのヒントを与えてくれるのではないかと考える。

Ⅲ、博学者の系譜

いずれに時代にも、諸学に通じた博学な学者は存在した。しかし我が国の場合、とりわけ19世紀末から20世紀初頭にかけての時期に、博識を誇る学者が数多く登場したように思われる。[43] すなわち、明治維新を契機として西洋の近代諸科学が我が国に流入し、それら諸学が更に現代的に専門化されるまでの時期である。学問が現在と比べてまだ細分化されていなかった当時、学者は多くの領域に通じていることが求められ、実際、多くの知識を彼らは吸収していった。また、明治維新以降に急速に学問の近代化が進んだとはいえ、それまでの漢学を中心とする伝統諸学も急速に姿を消すことはなく、本草学や物産学といった、いわゆる「多識の学」に通

じていた者も少なからずいた。とりわけ大正時代ともなれば、それまでのあまりに急速な富国強兵に対する反動から、それを推し進めてきた近代諸学の陰に隠れてしまった伝統的な学問に改めて光が当てられるようになった。加えて、アカデミズムの世界でこれまでほとんど取り上げられることのなかった各地の郷土の歴史や民俗、風俗などが学問の対象に含まれていき、学問の世界は、こうした「民間の学」を加えて大きな広がりを見せるようになった。[44] このような学問を取り巻く状況を背景として、近代日本の一時期に古今東西、和漢洋に通じた百科事典のような博識が次々に輩出されたのではないか。[45]

さて、誰を博学とするかは、取り上げようとする者の専門や興味、問題意識によって異なるであろうが、ここでは以下の３名を取り上げることにした。博覧強記ゆえに話題とされることの多い南方熊楠と、熊楠の学風を受け継ぐといわれる金関丈夫、それに百科全書派といわれる林達夫の３名である。

（1）南方熊楠（1867－1941年）

この20年ほどで熊楠の知名度は急速に高まったのではないだろうか。書籍の出版や展覧会、それに南方熊楠顕彰会の活動を通じて、彼の名は、単なるブームを超えてかなりの程度広く浸透するようになったと思われる。[46] その理由としては、例えば、熊楠に関する調査・研究が進み、彼の残した学問的な成果がかなり具体的に明らかになってきたということもあろう。しかし、筆者を含めて多くの人は熊楠の膨大な学問的遺産に関心があるというよりも、むしろ彼独自の自由奔放な生き方に惹かれて熊楠に興味を持つようになったといえるのではないか。その自由な生き方とは、人に強制されることなく自分のやりたい事を、自分の意思で生涯続けることができたということである。やりたいこととは学問にほかならない。

幼くして読書と自然観察の面白さに目覚めた熊楠は、まじめな学生時代をすごしたとはいえず、東京大学予備門に入学するも、授業に熱が入らず

退学。20歳になって渡米して現地の学校の入退学を繰り返した後、アメリカ各地を渡り歩き独学を続け、やがて渡英。大英博物館図書館を中心に貧困と戦いながら研鑽を積み、34歳で帰国、以後、故郷の和歌山に戻り、田辺に拠点を置きやはり独学を続け、内外の学術雑誌に研究成果を公表していく中で、少しずつその学問的な名声を高めていく。晩年には昭和天皇への御進講という栄誉も与えられたが、没後（1941年）その存在は一部専門家の間を除き忘れ去られていった。それが、1980年代末頃になって、ある種ブームといえるまでに熊楠に注目が集まるようになり、[47] 今日に至るまでに熊楠の学問の見直しが進んでいる。地位や名誉に無縁であったとはいえ、生涯の要所で大立ち回りを演じた熊楠の一生は、あたかも活劇を見ているかのような痛快さを伴う。ここに彼の生き方が共感を呼び、繰り返し伝記が著され、多くの人に読まれる理由があるのだろう。奇人としてのエピソードも豊富である。

しかしその一方で、南方熊楠とは何者かと問われて即答できる人は少ないのではなかろうか。熊楠が考察の対象とし、研究に取り入れた学問分野、話題はあまりに広範に及び、その学問は難解だとしばしば言われてきた。彼の学問的な全体像は、明らかにされつつあるとはいえ、まだその全貌が解明されているとはいえない状況にある。

熊楠は植物学者として多くの業績を残した。特に粘菌とよばれる植物と動物の間に位置する下等生物の研究に関しては第一人者だった。しかし彼の学問は、単なる植物学を超え、生物学の域を凌駕していた。民俗学、人類学、歴史学、宗教とりわけ仏教学に通じ、故事、説話、神話をちりばめ、曼荼羅について構想した。彼の著作集を見渡すと、あらゆる事柄、まさに森羅万象にわたって博識であったことがわかる。学問分野の面から彼の学問にあえて一つの枠を当てはめるのであれば、「博物学」ということになろう。それも、天然物を扱う狭義の博物学ではなく、総合学として百学連環を成す広義のそれである。熊楠の好奇心、学問的業績の広がりをかんがみれば、博識をイメージさせる博物学者という肩書きこそがふさわしい。

熊楠の学問を特徴付けるのは、扱われる領域の広さもさることながら、そのあふれるばかりの博識をちりばめた研究の整理の仕方にあるといえる。熊楠は膨大な数の論文やエッセイを著したが、著書の数は多くはなかった。[48] よく知られた熊楠の著書としては、『十二支考』（岩波文庫版、平凡社東洋文庫版あり）が挙げられる。ここで扱われているのは、文字通り十二支に登場する動物ではあるが、そこに盛り込まれている情報は膨大であり、限られた紙幅に多くの文献からの引用を含む彼の博物学的な研究成果が盛り込まれ、きわめて密度の濃い内容となっている。詮索考証癖は武藤と並ぶ。さらに武藤を上回るのは、寄り道のすさまじさである。武藤は博学とはいえ自然科学、狭義の博物学に立ち入って言及することはほとんどない。これに対して、南方は人文·社会に加えて自然界に関する膨大な知識を誇る。それゆえ、飛躍の度合いは、よりはなはだしいものになる。話題が次から次へとわき道にそれるので、何について述べているのか読み手は混乱してしまう。熊楠の知識が連想の赴くまま披瀝されて飛躍が多いので、読み手には話しの筋がなかなか見えてこない。有り余る情報が事例として次から次へと開陳され、細かい事実が際限ないほどに蓄積されていくものの、整理されることはあまりない。悪く言えばまとまりがなく、論旨がはっきりしない。熊楠には理論がないと批判されることさえある。

熊楠は、細かい事実をおろそかにしなかった。むしろ、それらを連想が赴くまま次々につむぎだしていくところに彼の学問の特徴があるといえる。理論の枠をはめることよりも、まずは書籍·資料から事実を列挙し、それらを積み重ねていくことこそが重視されているのである。[49]

（2）金関丈夫（1897－1983年）

医学博士であった金関丈夫は、台北大学や九州大学など、アカデミズムの世界で解剖学者、自然人類学者として活躍した。その傍ら自らの学問領域を民族学や考古学などへと広げていき、きわめて多岐に渡る膨大な研究成果を残した。しかもそれらの業績は、いずれも単なる医学者の手すさび

といった域をはるかに超え、研究史を踏まえて十分に文献を渉猟したものが多く、学術的にも高い評価が与えられるものであった。

九州大学の教授時代、金関は山口県土井が浜で発掘された大量の人骨を調査して、日本人の起源が縄文人と弥生人の混血にあると考えて注目を浴びた。この説が後に継承･発展させられて今日の日本人形成論の土台となったという。[50] これは解剖学者で形質人類学者、考古学者である金関の華々しい業績であるといえる。この土井が浜の人骨に関する調査・研究だけでも金関の学問の広さと深さを知るには十分であろう。しかし彼の業績はそれだけにとどまらない。ほかにも民俗学や言語学に関する大量の文献･資料に依拠した業績があり、文学や美術、芸能、故人の断簡、墨蹟についても深く理解し、論じることができる趣味人であった。

大林太良　―　彼も南方熊楠･金関丈夫の博学の民俗学･人類学者の系譜に連なる　－　は、こう述べる。「・・・彼は近代日本における稀有な学者であった。彼と同世代の人類諸科学の研究者の間で一番博識であることは、衆目の一致するところであった。自然科学から人文科学、古今東西にわたる広い学殖をもった学者であった。古典文学から俗文学、口承文芸、遊戯から語源、民俗の万般にわたって学問的関心と好奇心を抱き、悠々と学問をたのしむ文人であった」と。[51] 書誌学者･文学者の森銑三は、「金関丈夫博士の学界における存在は、一つの驚異に値するといってよいのではあるまいか」と述べる。[52] 金関も、熊楠や武藤と同様、興味を持った事柄に関しては、書籍･資料を列挙して、引用を含めて徹底的な考証を展開した。自分の学問の幅の広さについて聞かれると、金関は「遊びですよ」と答えたという。[53] 民俗学者の谷川健一は、金関丈夫を「和漢洋に関する象のように重い知識と鳥のように軽い精神を持ち合わせた」人であると評した。[54] 博学者とは、好奇心を縦横無尽に発揮させることができる軽やかな精神の持ち主なのであろう。そうした遊び心を持つからこそ、広く学問を愉しむゆとり生まれるのではないか。金関の学問の特徴も、特に文学や、民俗、言語に関しては徹底的に文献を博捜する考証を重んじるスタ

イル、つまり熊楠や武藤と同じ個別的な事実をこそ重んじる学問的なスタイルにあった。その博識と徹底した文献の博捜に基づく考証とその成果は、例えば、「南鐐名称考」や「牧野史略」、「杜子春系譜」、「十六島（ウップルイ）漫談」など『木馬と石牛』（新編、岩波文庫）や『文芸博物誌』（法政大学出版局）などに収められている論文や随筆から十二分にうかがうことができる。ほかにも金関ならではの、例えば、「わきくさ物語」や「アイヌの腋臭」、「匂ふ文学」、「てん足の効用」、「台湾本島人洗骨の風俗」などといった医学者としての人体に対する関心から著された研究が数多く存在する。さらに、「長崎県平戸獅子免出土の人骨」など、本来の専門領域である解剖学者、形質人類学者としての調査・報告が数多く発表されているのである。[55)]

金関は、大学教授として理論や方法論、思想にも造詣が深かったはずである。しかしその一方で、細かい事実をおろそかにせず、膨大な資料、文献に基づいて個別的な事実を明らかにしてそれらを蓄積していき、その先を目指すという手法を採用した。まずは細部を重視し、そうした事実の積み重ねから一般化を目指すという意味で、金関も武藤や熊楠と同様の論証のスタイルを持ち、それを実践していたのである。

（3）林達夫（1896－1984年）

林達夫を武藤長蔵と関連付けてここで取り上げることには異論があるかもしれない。一般に林は、評論家、思想家、編集者として知られており、思想家であれば歴史や社会を扱うにしても細部に拘泥せず、演繹的な手法を用いて全体状況を抽象的に概括するのが普通と考えられているからである。だが林は、歴史家として細かい事実をもおろそかにしない実証家としての側面をも兼ね備えた碩学であった。

林は、自らの生涯を省みて、一生を舞台稽古に費やしてきたと回顧する。晩年に至るまで彼は好奇心を失わず、勉強・研究が好きであった。自らの研究成果を論文や著作にまとめて世に問うことよりも、好奇心の赴くまま

新たな学問分野に通じることを優先させた。その結果、百科全書派と呼ばれるほど広くて深い学識の持ち主となったが、著作の数は、長寿であったにもかかわらず、名声の高さと比べればそれほど多くはない。[56)]

林の博識を図り知るには、彼が『平凡社世界大百科事典』の編集責任者であったことを知るだけで十分であろう。その学識の広さ・深さは、「精神史」（後述）をはじめとする彼の含蓄のある諸論考からも十分うかがうことができる。園芸家でもあった林は『ファーブル昆虫記』（岩波文庫）の翻訳者でもあり、まさに博物学者の風貌の持ち主であった。

林達夫はアマチュアの役割に注目していた。[57)] 諸学に手を染めて、それらに「通じて」しまった林は、まさに偉大なるアマチュアであるといえるが、この点は、アカデミズムの世界にも属していたことがあった林を在野の学問世界（民間学）の中にも位置づけることを可能にすると考えられる。[58)] とはいえ、林の学風は、文章のスタイルも含めて、一般の民間学者と比べれば、きわめて洗練されていた。林自身は園芸家として泥にまみれることはあったであろうが、彼の学問は微塵も泥臭いところはなかった。

さて、アマチュアに関して林は、園芸家を例としてきわめて重要な指摘を行なっている。それは、内藤俊人のまとめ方に従えば、専門家が「一般的、抽象的、概括的、平面的」である一方、アマチュアとは「殊別的、具体的、個性的、立体的」に行為する(物を書く)との区分である。[59)] これは園芸の世界のみならず、学問一般に当てはまる指摘ではなかろうか。優れたアマチュアとして林は、具体的、個別的に物事を観察することを心得ていた。しかしこれはまた、プロの歴史家が身につけておくべき必須の性癖であるともいえる。「一見したところ同じように見える物や事柄の間に差異を見ぬいたり、取るに足らぬささやかなものの内に重大な出来事を感取する能力は、歴史感覚の中枢神経である」。[60)] まさしくこれは、武藤長蔵、そして熊楠や金関丈夫もが共有する能力であった。

そうした林の歴史家としての感性、いわば「個物の救出への傾向」（今村）がみごとに発揮された作品が、晩年の代表作「精神史　－　一つの方

法序説」であった。ここでは、「方法」という言葉で何らかの学問的な方法論が吟味されるわけではない。ここでの「方法」とは、林自身の言葉を用いれば、「研究の「現場」における、あれやこれやのてんやわんやの操作のことである」とされる。[61] 歴史学や考証学では、結論に至るまでの、もしくは話題を終点に到達させるまでの書籍や資料を駆使した細かな事実の確認をおろそかにすることはできない。林にとってのみならず、熊楠や金関、武藤の膨大な数の文献を用いた考証とは、まさにこの書き手にとっての「てんやわんや」であり、それを含めて我々は、彼らの学問、研究の特徴に注目しているのである。[62]

以上、３名の著名な博学者の簡単なプロフィールと学問的な特徴について述べてきた。武藤を含めたこれら博学者の共通点をここでは三つにまとめておく。

一つは、いうまでもないことだが、まさに博学者としての側面である。とはいえ、彼らはあらゆる領域に同じ程度に通じていたというわけではなく、それぞれに学問の土台となる専門分野があった。すなわち、武藤であれば、経済学、歴史学が根底にあり、熊楠は生物学や民俗学、仏教学、金関は解剖学や人類学、考古学、そして林は思想、哲学をベースとして諸学を越境する博識を誇った。広く見渡して情報を摂取し、知識を整理･分類し結びつけるという点で、彼らの学問には博物誌という性格があった。むろん、狭義の博物学者はここでは熊楠にしか当てはまらないが、いずれも広い意味での博物学的精神の持ち主だったといえるのではないか。

二つ目は、学問･研究の方法論的な特徴として、いずれも個別的な事実を重視し、具体的な事実を積み重ねていく手法の持ち主であるということである。あたかも狭義の博物学者がささやかな差異に注目して植物や昆虫、鉱物の標本を収集するように、文献を駆使して細かな事実を収集し、些細とも言える差異にこだわり、そこから一般化を目指すという共通の思考法が看取されるのである。

三つ目は、ここで取り上げた博学者のいずれの学問世界も、アカデミズ

ムの世界を見ているだけではその全貌をうかがうことはできないということである。ほぼ生涯を通じてその世界にいた金関であれ武藤にしろ、研究の内容とスタイルは、近代的なアカデミズムの世界からはかなりの程度逸脱するものであったといえる。また、武藤は在野の学者・研究者との関係を大切にした。(Ⅰ(3)「交友関係」を参照)

こうした特徴を兼ね備えた学問分野として挙げられるのが、博物学と民間学である。そこで、以下では博物学と民間学がどのような学問なのか、まず簡単に検討する。次いで、改めて武藤の学問の特徴を博物学と民間学の性格と照らし合わせることにより、独特といわれる彼の研究を広く学問世界の中に位置づけることを試みてみたい。

Ⅳ、博物学、民間学と武藤長蔵

(1) 博物学

博物学は、動物、植物、鉱物といった天然物の記録や記載、命名や分類を中心とする学問分野であり、後に生物学や鉱物学、地質学などに分化していった。[63] また、我が国をはじめ東洋では、博物学的な学問は、本草学という名称で発達した。我が国の場合、それは、『本草綱目』をはじめとする中国の本草書に記載されている植物を中心とした天然物が、我が国のどれを指すのかを確認する作業を基本とした。そこで扱われる天然物は、おもに医療、薬品として役に立つ有用物であったので、本草学は医学や薬学の発展と密接な関係を持った。いうまでもなく、薬種の研究といった実学的な要素は、西洋の博物学にもあった。

さて、博物学をこのように捉えてしまうと、博物学とは時代遅れの地味な学問分野であるとの印象は拭えないであろう。事実、現代の義務教育の過程では、博物学という授業科目を見いだすことはできない。近年博物学再考の動きが見られるとしても、[64] それは、そのような世界に関心のある一部の人々の間でのことであって、社会全体を巻き込んだ動きとまでは、

到底見なすことはできない。ところが歴史をさかのぼってみると、学問が現代的に細分化する以前の近世・近代において、博物学は今よりももっと親しい学問分野であったといえ、とりわけイギリスでは近代の一時期、社会的なブームといえるほどに博物学が広く普及し、愛好家が多数存在したことがあった。[65] しかもその時代、博物学自体が上で述べたような天然物を扱うという狭い意味を越え、広くさまざまな事柄や現象を含めて考察の対象とする「開かれた」学問としての性格を見せつつあった。すなわち、文字通り広く(博く)研究するという博物学が本来持つ広い意味での特徴が鮮明になったのである。

そうした広義の博物学の発展を促した要因として、大航海時代の到来を挙げることができよう。「長期の16世紀」における大航海時代は、ヨーロッパ世界の拡大を通じて中世から近世への、封建制から資本主義への移行を通じてヨーロッパを中心とする「近代世界システム」(「ヨーロッパ世界経済」) を誕生させ、世界史の画期を形づくったといえるが、その影響は博物学の世界へも及んでいた。世界各地とヨーロッパとを結ぶ航海が盛んになると、それまでヨーロッパでは知られることのなかった自然界の珍しい物、異国の文物がこの地に流入していった。17世紀になれば、オランダやイギリスなどの東インド会社をはじめとする海外との通商をつかさどる国策会社が設立されていき、植民地や天然資源、未知の物産に対する国家的な関心の高まりのもと、ヨーロッパ本国には大量の異国の産物や生物、標本、情報が流入していった。それが博物学の発展を促したことはいうまでもない。当時裕福な貴族や大商人の間では、そうした珍しい諸物を収集することが流行した。コレクションの対象となったのは、異国の珍しい品々、すなわち植物や昆虫、動物の骨格、貝殻、鉱石、化石から古代の遺物、古銭やメダル、さまざまな珍奇なものまでが広く収集され、展示された。こうして各地でヴンダーカンマー Wunderkammer もしくはラリテーテンカマー Raritätenkammerと呼ばれるコレクションの展示室が出現し、[66] こうした動きも広義の博物学を発展させる契機となったと考えられる。

さらに18世紀になると国家的な規模で組織される探検隊が、政治的、経済的な使命を受けて世界各地へと派遣され、植民地の確保や経済的有用物の商品化を目的として未知の土地に関する総合的な学術調査が盛んに行なわれるようになった。このような探検博物学を隆盛に導いた成果の代表的なものとしては、イギリスのクック船長やフランスのブーガンビルによる世界周航探検が挙げられる。またドイツのフンボルトによる南米探検もこれに加えてよいだろう。こうした動きは19世紀にも見られ、ダーウィンのビーグル号による探検航海やアメリカのペリーによる日本遠征を含む周航探検などが続いた。[67] いずれの探検航海にも調査研究のために学者（博物学者）が参加しており、その成果は大型の豪華な報告書としてまとめられた。そこには狭義の博物学に関する情報のみならず、地理、気候、風土、社会の歴史や制度、民族、風俗、宗教などに関する、調査の対象となった諸地域の総合的な研究成果が盛り込まれることが一般的であった。こうして博物学は、広い意味では、生物学のみならず、地理学、歴史学、考古学、民俗学、人類学、言語学、宗教学、天文学、地質学など地球・人類に関するあらゆる学問を包摂した、いわば総合学としての役割を担うことになった。[68] 近代科学が発達して諸学が細分化する前の一時期、博物学は「諸学の王」とでもいえる位置を占めていたのである。

さて、博物学とは記載･記述の学であり、大小さまざまな事実の積み重ねが求められる。新事実の発見のためには大量のデータ、すなわち情報、資料、標本などを集める必要がある。数学や物理学など、抽象化された理論を重視する学問が「質」を扱うとすれば、博物学は「量」を扱う学問であるといえる。「質」を扱う学問では、物事を公式や理論に還元させて細かい事例を捨象し、原理を突き詰めることが重視される。これに対して、博物学は、その性格からして扱う「量」の増大を尊ぶ学問であるといえる。博物学の発達とは、扱う対象の増加にほかならない。細かい事例の蓄積が地球の実態を明らかにし、その多様性の解明につながる。その意味で、博物学とは、まさに「地球が保有している物事の在庫調査」なのである。[69]

博物学の、細かい事例の「量」の増大を尊ぶという特徴の一側面を、生物界の樹形図を念頭に置きながら見てみよう。例えば、昆虫に注目する者であれば、素朴な観察や標本の蓄積から、まず昆虫を含む節足動物とその他の動物との違いが見えてくるであろう。次いで節足動物を集める中で、足を６本持ち、体が頭部と胸部、腹部の三つに分かれた一群（これが昆虫である）とそれ以外の節足動物とが分けられていく。また昆虫の中にも鱗翅目Lepidopteraや半翅目Hemiptera、直翅目Orthptera、膜翅目Hymenoptera,鞘翅目Coleopteraなど様々な種類があり、データが増える中でさらなる細分化が必要なことが見えてくる。ここでコレオプテラ（甲虫）に注目すれば、とりわけカミキリムシ科Cerambycidaeに大小様々な形や色のものが極めて多く含まれる。そこでカミキリムシに関して、データ、標本を増やしていけば、ハナカミキリ、トラカミキリ、コブヤハズカミキリなどの仲間に同定の困難な極めて似た種を含む諸属があり、更なる調査と分類が必要なことがわかる。こうして事例の「量」を増加させ、観察を進めて差異を認識していくなかで、ようやく生物としての「種」、例えばコブヤハズカミキリの仲間であれば、コブヤハズカミキリ*Mesechthistatus binodosus binodosus* Seki、タニグチコブヤハズカミキリ*Mesechthistatus taniguchii* Waterhause、ミヤマコブヤハズカミキリ*Mesechthistatus furciferus meridionalis* Hayashi、ヒメコブヤハズカミキリ*Parechthistatus gibber* Bates、ヒゲナガコブヤハズカミキリ*Parechthistatus gibber longicornis* Hayashiなどといった図鑑で識別されている個体に帰着するのである。[70]しかし、場合によっては同じ種であっても亜種に分けられることがあり、また生息する地域や季節によっても固体に変異を生じさせることがある。とりわけチョウ関しては、そのような差異が翅の微細なデザインの違いとなって現れる。[71] そのような微細な事実を明らかにするために、博物学的精神を持つ昆虫学者は、一つの種に関して、観察、採集する地域や季節の違いを考慮しながら膨大な事例（データ、標本）を収集していくのである。

さて、博物学が以上のような性格を持つとすれば、すでに概観した、まさに学識の「量」と広がりを誇る博学者たちの学問的な特徴と博物学のそれとは、どのような点で重なるといえるのであろうか。博物学の性格を念頭に置きながら、あらためて武藤長蔵をはじめとする博学者たちの学問的な特徴を列挙すれば、以下のようにまとめられるであろう。

・博学であること：広義の博物学は、一種の総合学であった。学問が細分化される以前、博物学は森羅万象を扱ったのであった。一方、博学者は自らの好奇心に突き動かされながら学問の境界を越境して、学識を蓄積していく。武藤といい上述の博学者のなかには狭義の博物学者は熊楠以外にはいなかったとはいえ、博物学に備わる「博さ」や越境をものともしない徹底的な探究心をかんがみれば、そうした性格を備えた博学者とは博物学者であり、彼らの学問は博物誌なのである。

・量を誇る収集家であること：博物学の「量」的な正確についてはすでに述べた。本稿で扱った博学者は、蔵書の収集を意図していたか否かは問わず、いずれも文献を広く、そして多く参照し、多数の事例を集め、その博策の成果を事細かな考証に生かしていた。そうした積み重ねから、彼らは広がりとともに「量」の面からも圧倒的とも言える知識を身につけて博学となったのである。

・微細な事実をおろそかにしないこと：本稿で扱った博学者は、いずれも文献を博策して細かな事実、事例を蓄積していき、それを最終的な結論へと生かしていった。上述の昆虫の例で示したように、博物学では、一つの種を明らかにするためでさえ、変種を考慮しながら大量のデータ、標本が蓄積され、細かい差異の認識からその種の実態が解明される。扱う対象は異なるとはいえ、人文科学の世界の博学者による文献に依拠した事実の収集、実態の解明も、発想と方法は共通しているといえるのではないか。例えば、武藤の書誌学的な知識に基づいた徹底した考証などは、まさに、博物学者が幾多の観察・採集・標本の蓄積の果てに種の実態を明らかにしていく過程に実によく似ているのである。武藤の考証癖

は、こうした博物学者の細かい事実へのこだわりを念頭に置くと理解しやすいのではないか。

・発想が帰納的であること：博物学は、まずは膨大な「量」の事実を扱いながら、その「量」が増える過程で、分類・体系化が行なわれる。こうした「個別から総合へ」という物事の総括の過程は、上で見た博学者に共通する発想であり、手法であった。このような帰納法的な手法の重視という面からも、博学者の学問と博物学との共通性をうかがうことができるだろう。[72)]

（2）民間学

「民間学」とは、「在野の学」のことであり、既に通用していた「民間史学」という呼称にならって歴史学者の鹿野政直がその用語を採用し、概念を確立して普及するようになった。[73)]「民間」という言葉が用いられていることから、その対立項として「官」の世界、すなわちアカデミズムが想定されていることは、容易に見て取れよう。民間学とは、アカデミズムの学問の枠ではすくい取ることができない雑多な内容を持つ民間の、在野の学問を指す。

周知のように、明治維新を境とする急激な変化は学問の世界にも見られるものであった。これまでの漢学を中心とした伝統的な学問は、近代科学に裏打ちされた西洋の学問に取って代わられ、その担い手は、江戸時代の蘭学・洋学者とは比較にならないほどの一大勢力を我が国の学問界に築き上げたのであった。こうして、（東京）帝国大学を頂点とするアカデミズムの世界では、欧米流の学問が、まずはお雇い外国人や先進諸国からの帰朝者を通じて伝授されていくのだが、そこで教授される学問とは、なによりも当時の日本国家で必要とされる科目、すなわち富国強兵のために役立つ「実学」であった。

かくして、学問の西洋化、実学化が押し進められていくなかで、そうした範疇に属することなく、在野の学者によって連綿と受け継がれてきた伝

統的な諸学は、学問の表舞台から退いてしまうことになった。こうした近代化の過程で見過ごされてしまった学問にあらためて光を当てるために、民間学という概念は打ち立てられたのだといえるだろう。

ところで、在野の学の伝統は、西洋化、実学重視の風潮が高まるなかで断ち切られてしまったわけではない。1910年代から1920年代にかけて、大正デモクラシーの機運の高まりのなかで民間学は大きな盛り上がりを見せ、民間学の「英雄時代」を形づくっていったのである。この頃の学問界の動向をアカデミズムの内と外に分けて見てみよう。[74)]

まずアカデミズムの世界では、富国強兵を主眼とした硬直した学問に対する見直しが図られるようになった。明治の自由民権運動、そして大正デモクラシーの展開は、「官」の世界の外側に「民」の世界があるということをアカデミズム内部の学者にしっかりと認識させたとともに、吉野作造や河上肇、美濃部達吉といった大正デモクラシーの思想基盤を担う学者が登場したことにより、アカデミズムの内部にも「民」の要素が加味されるようになった。

更に興味深いのは、アカデミズムの外の動きである。1910年頃から「知の巨人」としかいいようのない一連の博学者が、自らの学問を創り上げ、注目されるようになった。すなわち、柳田國男、伊波普猷、金田一京助、津田左右吉、折口信夫、そして南方熊楠などといったスケールの極めて大きな民間学者である。彼らに牽引されるかたちで20世紀前半の我が国は、民間学の「英雄時代」を迎えたのである。

では、こうした「知の巨人」を始め、有名無名の様々な篤学者によって支えられた民間学にはどのような特徴があったのだろうか。ここでは、武藤長蔵をはじめ、第３章で取り上げた博学者の学風を考慮しながら民間学の特徴を、試みに以下の３点にまとめてみた。

一つは、アカデミズムの世界ではともすると取り上げられることのなかった物事を扱ってきたということである。富国強兵を主眼とする国家のための実学が重視されれば、人々の生活はとりあえず考慮の外に置かれて

しまう。民間学は、まさにこの「生活」に関係する学問であるといっても良いであろう。とはいえ、それは何も風俗学や民俗学のような生活に密着した学問分野に限らない。我々ヒトを扱う人類学や民族学、生活を過去から見据える歴史学や考古学、また、生業という面から多くの農書を生み出してきた農学や、地域の物産を扱う物産学や名物学、さらには健康に関連する薬種を主に扱う本草学や医学さえそこに含まれる。民間学は、これらの諸学を通じて博物学的な世界と密接に関連しているのである。

では、こうした民間学の特徴を、本稿で取り上げた武藤を含む４名の学者は具備しているといえるだろうか。まず、熊楠と金関に関しては明らかであろう。両者には民俗学の素養があるほか、熊楠は博物学(本草学)、金関は民族学や考古学に通じていたことから、彼らの学問は、― 金関の場合はアカデミズムの内部にいたにもかかわらず ― 「生活」との関わりを通じてアカデミズムの外の世界に結びついていたといえる。西欧の芸術やルネサンスの高雅な世界に触れることの多い林達夫の学問は、一見すると「生活」とは無縁の印象を与える。しかし、彼の場合も、在野の学者としての経験を通じて、そして何よりも「アマチュア」の園芸家として「生活」に密着しながら学問を続けた民間学者であったといえる。

これに対して、武藤長蔵の学問は、彼の業績を見渡す限り「生活」との関わりはあまりない。武藤は歴史学者であったとはいえ、扱われる題材は直接人びとの生活とは関係ない事柄が多い。しかし、生活に関して無関心であったとはいえず、例えば、クリスマスを扱った論考においては、クリスマスというまさに生活と密着した行事が、ムトウイズムの手法で描き出されているのである。[75] さらに、アカデミズムの世界では取り上げられない題材を扱うという点も、武藤の学問には見られた。確かに商業や経済、歴史を中心にテーマが選ばれるとはいえ、語源や事物起源に主眼を置く彼の研究課題と書誌学的な考証風の学風は、体系を重んじ理論化を目指すアカデミズムの学問から見れば、やはり学界の主流を成すとはいえないのである。「生活」に関係する研究は少ないとはいえ、アカデミズムの学問と

の関係から見た民間学の特徴に照らし合わせれば、武藤の学問に関して以上のようなことがいえるであろう。

民間学の二つ目の特徴は、それが地域に密着した学問だということである。民間学は、近世の地域的な文化、風土の中で培われてきた。そこから地域の風土に根ざした研究成果が生まれ、蓄積されてきた。地域の成り立ちに光を当てる歴史学（郷土史、地域史）や考古学、地域のいわば財産目録作成のための物産学、地域の風土･生態と切り離すことのできない農学など、民間学で扱われる諸学は、地域との密接なかかわりの中で発展を遂げてきた。さらに言えば、民間学の世界では、このような科目名の列挙はあまり意味をなさない。もし地域の実態解明に研究の焦点が当てられるのであれば、好奇心の赴くまま、学問間の壁など意識せずに幅広く総合的に研究が進められていくであろうし、それゆえ、民間学者には博学者が多く、特定の地域に関する百科全書的な知識の持ち主として知られる人物は、各地に見出された。長崎学の三羽烏をはじめ沖縄学の伊波普猷や比嘉春潮、東恩納寛惇、真境名安興、アイヌ研究の金田一京助、知里真志保、江戸通の三大人といわれた三村竹清、林若樹、三田村鳶魚などはその好例であろう。[76)]

さて、本稿で扱ってきた武藤を含む４名の学者の学問にも、こうした地域性ともいえる性格は強く刻印されていたといえる。武藤と長崎との関わりは、改めて指摘するまでもないだろう。武藤の名は、なによりもまず長崎学の泰斗として知られていた。熊楠の学問は紀州の風土無くしては考えられない。彼の学問は世界を視野に入れていたとはいえ、紀州でのフィールドワークによって支えられていたところが大きかった。また金関は、人骨の調査のほか、民俗や語源などの研究を通じて様々な地域と関わりを持ったが、とりわけ長く居住した台湾とのつながりは強かった。[77)] では、こうした地域との結びつきは林達夫においても見られたであろうか。西洋の芸術や思想に言及することが多い林の学風を考えれば、特定の地域との関係を指摘することは無意味であるように思われるかもしれない。さしあ

たり筆者は、彼が居住した鵠沼（神奈川県藤沢市）の地が、彼の学風を培う上で何らかの影響を与えたのではないかと推測している。気候が温暖で海にも近い鵠沼は、かねてより別荘地、高級住宅地として知られ、阿部次郎、和辻哲郎など多くの文化人を含む名士が居住し、訪れる地であった。このような気候風土の中で繰り広げられた知的な交流や、さらには園芸趣味を通じて鵠沼という地と林は結びついていたのではないか。[78)]

民間学の三つ目の特徴は、経験を重んじ、帰納法的な性格が強いということである。個別的な事実をおろそかにせず、その積み重ねから一般化を目指すという実証性は、民間学を支えた巨人のみならず西洋伝来の最新の理論に触れる機会の少ない地域の篤学者に広く見られる発想・手法であった。ことに農学のように実践的な性格が強く、生活に密着した分野であれば、日々の経験こそが成功の土台となったはずである。武藤をはじめとする博学者の学問、それに博物学の特徴を形づくる帰納法的性格は、民間学にも見られる重要な要素なのである。とはいえ、先にも指摘したように、民間学が博物学的な世界と密接に関連し、また民間学者に特定の地域に関する百科全書的な知識の持ち主が多いということを考慮すれば、民間学と博物学は通低する部分が大きく、手法として帰納法が双方で重んじられるのは当然といえるのかもしれない。実際、我が国の博物学者、本草学者の多くは、民間学者として『民間学辞典人物編』[79)] に項目が設定されている。さらにいえば、本研究で武藤長蔵との比較のために取り上げた南方熊楠、金関丈夫、林達夫の３人も、ともに同書で民間学者として扱われているのである。

（3）小括　―　博物学、民間学と武藤長蔵

この第４章の考察の目的は、博物学と民間学がどのような学問なのか検討したうえで、武藤の学問の特徴を博物学と民間学の性格と照らし合わせることにより彼の研究を広く学問世界の中に位置づけてみたい、というものであった。以上の考察を通じて、独特の癖があるとされる武藤の学問も、

学問世界の中で決して孤立しているわけではなく、例えば、博物学や民間学といった伝統的な学問と共通する手法を備えているということが、ある程度は示すことができたのではないかと思う。

厳密に言えば、武藤は博物学者ではなかった。熊楠のように博物学（本草学）的な世界を直接考察の対象としたことはなかったし、ほかの題材を主なテーマとして博物学に言及することも、あったとしてもそれはわずかであった。[80] しかし、武藤には博物学的な精神が備わっていた。広く見て、「量」を誇るがごとく事例を収集してそれを実証に生かし、結論へと導くといった手法は、博物学者のそれであるといえる。但し、研究が事物考証の段階にとどまってしまうことが多く、その先の全体のなかへの位置づけ、体系化といった一般化への意識があまり見られないという限界は指摘できそうである。

また、武藤は民間学の手法や精神をほかの民間学者と共有していたということも、以上考察で示すことができたかと思う。とはいえ、では武藤ははたして民間学者といえるかと問われれば、まだはっきりと断言はできないと言わざるを得ない。たしかに彼には、地域への密着や帰納法的な思考方法の持ち主という点でほかの民間学者との共通点は見出せるとしても、「生活」とのかかわりという点で、ほかの民間学者と比較すると「生活」との関わりは薄い。「生活」とまったく無縁ではないものの、社会経済、商業が主な研究の題材とされている彼の研究に「生業」の視点からの論及は、管見の限り、ほとんど見られないのである。ちなみに、既出の『民間学辞典人物編』には武藤の項目はない。[81]

しかし、少なくとも武藤が民間学と共通する基本的な手法や精神を備えていたということはいえるであろう。先に交友関係を見た際に指摘したように、武藤はアカデミズムの学問世界と在野の学問世界（民間学）との接点にいた。[82] 加えて、民間学の観点から、武藤に関して次のようなことが言えるのではないか。すなわち、武藤は民間学の手法、問題意識 ― これは博物学の手法、問題意識とも共通する ― をアカデミズムの学問世

界に適用しようとした。そしてムトウイズムの発揮を通じて近代的な専門科学である経済学や商業学、歴史学の学としての幅を拡大することに貢献したのではないか、と。[83)]

民間学の大家はいずれも新しい分野を開拓しながら独自の学問世界を作り上げ、各人の名前を冠してその学問世界を表現すほかないような、独自の学問世界を作り上げた。南方学、金関学、柳田（國男）学、津田（左右吉）学、折口（信夫）学などなど。[84)] 武藤もまさしく「武藤学」、つまり「ムトウイズム」としかいいようのない独自の学風をつくり上げたという点で、これら民間学の大家と並び称されるのではないか。

武藤の学問が博物学、民間学といった伝統的な学問と通低する部分が大きいからといって、彼の学問が「古くさい」ということにはならない。むしろ熊楠などの博学者、「知の巨人」の学問と同様、広く具体的に見て収集し、個別から一般化を目指すという学問研究の基本的な手法、すなわち普遍性を備えていたといえるのである。

V、教育者としての武藤　―　結びにかえて

武藤は高等商業学校教授として、長年研究のみならず教育にも携わった。最後に、教師としての武藤について一言触れて本稿の結びにかえたい。

近年高等教育機関では、教員に関する評価が厳格に行なわれるようになり、教師の資質が以前にもまして問われるようになった。では仮に武藤が現在に生きているとして教員評価を受けるとすれば、彼にはどのような評価が下されるであろうか。水準の高い緻密な研究を量産してきた武藤であり、独特の「癖」はあるとはいえ、研究者としての彼の資質には何ら問題ないと考えられる。しかし、教師としての彼に現代的な教員評価がなされるとすれば、残念ながら、かなり低い評価しか与えられないのではないか、さらには「問題教師」のレッテルさえ貼られてしまうのではないか、と推測せざるを得ないのである。

武藤の脱線講義は有名であった。講義の内容は、書籍にまつわる話を中心に、人生論からダンテ、シラー、ゲーテを経てカント、マルクス、マルサス、トインビーへと広がり、出島に触れれば、当然のことながらケンペル、ツンベルグ、シーボルトといった博物学者的な医者の考証へと話題は尽きない。「「交通政策」のノートなどは、一学期の半ばを過ぎても１頁にも充たない有様である」。「終業の鐘が鳴っても時の過ぎたのを惜しまれる如く、壇上にむらがる学生を相手に諄々と説かれた」。武藤の長広舌は学界や社交界だけのことではなかったらしい。しかし、「学生はこの脱線講義において世界を知り、文学、芸術から人生を知り、足元の長崎のことを知った」のであった。[85] 武藤晩年の講義の情景を以下に引用する。「・・・その頃私が教えを受けた先生の中で、未だに忘れ難い強烈な印象を受けたのは、武藤長蔵博士であった。・・・すでに定年退官直前で、しかも病弱であられた先生はよく休講された。然したまの講義の時は、まるで先触れのように女中か奥様に書物の一杯詰まった風呂敷包みを持たせ、自分自身も、小柄でやや猫背の、文字通り痩軀鶴の如き体に、抱えられる限りの書物を小脇に抱え、しずしずと教壇に進まれる姿が見えると、広い合併教室を埋めた満場の学生達の間から、期せずして一斉に拍手と歓声が湧き起る。暫らくするとさしもの騒々しい大教室がシーンと静まり、異様な緊張感が漲る。そして、やおら紫の風呂敷包みの中から取り出した書物を教卓の上に山のように積み上げ、一つ一つ書名、著者名、内容の紹介や相互関係の説明が始まる。そのほとんどが英･独･仏･西等の数ヶ国語の原書である。次いで、何処にこのような力が潜んでいるのかと思う程の熱っぽい迫力のある講義が、やや甲高い良く透る声で奔流のように絶え間なく迸り、私達をすっかり酔わせたものだ･･･」。[86] シラバスにおいて講義内容が拘束され、学生によって講義の開始終了時間さえもが評価される現在、武藤のような脱線講義の実践は、かなりの冒険である。

成績の評価に関しても、武藤は恣意的であった。高商の入試で、数学はほとんど零点、英語は満点を収めた受験生の評価をめぐって合格判定会議

が紛糾した際、「一芸特に語学に秀でた者は将来見込みが有る」と武藤が強力に弁護して合格した受験生がいたという。また、校則に照らし合わせて退学処分になりかけていた学生が、武藤の懸命の弁護によって罪一等を減じられて自主退学の措置となったということもあったという。[87)]

あるとき武藤は、小学生を前にして講演する機会を与えられた。すると、彼は、あろうことかアダム・スミスの著書の版の問題について語り始めた。あまりにも場違いな話の内容についていけない生徒たちが騒ぎ出すのもかまわず、武藤は延々２時間に渡ってしゃべり続けたという。自分と同じような好奇心を他人も抱いていて当然と信じて疑わない武藤の独断的信念は、小学生を前にしてみごとに貫かれたのである。[88)]

このような「常識を欠く」教師を現在の社会、大学は、文句なしに「良い先生」として評価することはあるだろうか。ところが、武藤は名物教授として学生からたいへん慕われる存在であった。「(武藤の) 学者らしい風格、純一無雑の人柄、憎めない奇行の数々、時流権勢に流されないヒューマニズムは学生の心を深く打って、学生思慕の中心であった」。[89)]「(武藤の) 並外れて純粋な学問的情熱と深い学識、純一無雑な衒学 (ペダントリー) と稚気、そして学生に対する無限の愛情 ― これこそが学生達を牽きつけて離さぬ人気の秘密であったろう」。[90)] 教え子たちは、卒業後も武藤を慕った。同窓会誌を紐解いてみると、武藤は同窓会会員の回想の対象として頻繁に会誌に登場するのである。「(武藤が) 昭和11年に定年退官されてはや半世紀を経るが、高商卒業生の間でこれほどに敬慕されている人も少ないようである。今日なお、瓊林会の機関紙等にしばしば登場するのである」。[91)] 武藤とは、いわば学生の心に火をともす、そのような存在であったのだろう。武藤の教え子の一人であった江頭厳は、彼を語るに際してエッケルマン『ゲーテとの対話』の一説を引用する。「真の教育者とは、言ってみれば、世の一隅に在って静かにしかも明るく燃え続ける一本の松明の如きものでなければならぬ。たとえ燃えつきても、それが放った火花 (ein Funke) は生徒たちの胸に飛び込み、火種となり、何時かまた発火して、炎々

と燃え上るものである」。[92)]

武藤は博識無限、シーボルト的、ゲーテ的、万有科学者的存在であり、研究者として膨大な量の成果を誇った。教師としてもおおらかな極めて個性的な存在であった。しかし、大学教師を取り巻く環境は、以前と比べて大きく変化した。昨今のように、成果主義のもと細かい評価項目によって短期的な成果ばかりが問われるのでは、武藤のような研究者・教師の持ち味は、おそらく十分には評価されないのではないか。このようなあり方をよしとする風潮がこのまま続くとして、はたして今後、我が国には武藤のような破格のスケールを持つ大学教師が登場する余地は残されていくであろうか。筆者が抱くささやかな危惧である。

注

1) 馬場誠「武藤先生を悼む」、『扶揺』、第５号、1943年、26ページ。
2) 「百学連環　―　百科事典と動物図譜の饗宴」2007年９月22日～12月９日。同展の趣旨は、知の体系化やその継承について百科事典や博物誌、図鑑、印刷技術などの側面から回顧することにあった。
3) 『武藤教授在職三〇年記念論文集』（『商業と経済』、第18号第１冊特輯）、1937年。年譜の内容は、在職時の出張の記録が中心である。叙勲、官位に関する記録も目立つ。
4) 柴田一雄「武藤長蔵博士と武藤文庫」、『研究叢書』、第５号「年史編纂の現状と展望」、2004年、４ページ。武藤を追悼した文章として、例えば以下がある。河野吉男「武藤先生への追慕」、馬場誠「武藤先生を悼む」、山口是知「武藤先生を悼む」、以上『扶揺』、第５号、1943年。馬場誠「武藤先生を憶ふ」、『社会経済史学』第12巻第５号。馬場誠「武藤さんの想出」、『長崎談叢』、第23輯、1943年。
5) 寺崎勇夫「跋　武藤長蔵先生のこと」、武藤長蔵（山田憲太郎編）『海外文化と長崎』、千倉書房、1977年、17－18ページ。
6) 『日欧通交史』、岩波書店、1942年。
7) 姫野順一「武藤長蔵の人と学説」、『研究叢書』、第５号「年史編纂の現状と展望」、2004年、27ページ。
8) 野村の学風については高村象平、小松芳喬『日本における経済史学の発達』、要書房、1949年を参照。

9) 寺崎勇夫「跋」、14－15ページ。

10) 武藤文庫のアドレスを以下に示す。
http://www.lb.nagasaki-u.ac.jp/search/ecolle/muto/index.html。武藤文庫については、以下も参照。柴田一雄「武藤長蔵博士と武藤文庫」。

11) 姫野順一「武藤長蔵の人と学説」、27ページ。

12) 寺崎勇夫「跋」、17－23ページ、姫野順一「武藤長蔵の人と学説」、18－20ページも参照。子息による武藤の交友関係の回想としては以下がある。武藤琦一郎「私の父・武藤長蔵とトラウツ博士とボクサー博士」、『洋学』第５号、1997年。

13) 『鴎外研究』第５号、昭和11年、筆者未見。

14) 平川祐弘「マルクスが引用したダンテ」、『朝日新聞』、1974年３月14日。江頭厳「武藤長蔵先生の思い出（その３）」、『瓊林』、第69号、1986年。

15) 菊池寛と芥川龍之介、それに武藤と永見徳太郎（後述）の４名が写った写真が残されている。柴田一雄「学内探訪　武藤文庫」、長崎大学広報誌CHOHO、Vol.13、2003年、２ページ。

16) 新村出『南蛮更紗』、平凡社東洋文庫、1995年、365ページ。

17) 武藤長蔵「浜田耕作博士の追憶」、『浜田先生追悼録』、1939年、334－343ページ。

18) 城山三郎の広田の生涯を扱った小説『落日燃ゆ』に、武藤の名前は出てこないが「オランダの歴史に詳しい教授」として武藤が登場する（新潮文庫版、66ページ）。

19) 武藤の国際関係に対する関心については、姫野順一「武藤長蔵の人と学説」、25－26ページを参照。

20) 中嶋幹起『古賀十二郎　―　長崎学の確立にささげた生涯』、長崎文献社、2007年。ところで、古賀は長崎市立商業学校在学中、若くして亡くなった平戸出身の史学者菅沼貞風の『大日本商業史』を読んで歴史学を志すようになったという。中嶋、46ページ。南進論の嚆矢として知られる『大日本商業史』が1940年に復刊されたとき、武藤は跋文を寄せている。また、復刊に際しては、当時（昭和15年）親和銀行副頭取で佐世保商工会議所会頭であった北村徳太郎の支援があった。寺崎勇夫「武藤先生と北村徳太郎氏」、『瓊林』、第62号、1983年、65－69ページ。武藤の人的なネットワークは長崎県北にも及んでいたのである。北村徳太郎については以下を参照。西住徹編著『北村徳太郎・談論編、資料編、論文編』、親和銀行、2002－2007年。

21) 永見には長崎に関する著作もある。『南蛮長崎草』、歴史図書社、1978年（大正15年刊行の再刊）。

22) 大槻如電に関しては以下を参照。山口昌男『「敗者」の精神史』、岩波書店、1995年、173－175ページ。山口昌男『内田魯庵山脈』、晶文社、2001年、227－240ページ。

23) 1934年の料亭「瓊林館」での会食には、武藤と大槻如電のほか、永山時英、古賀十二郎、それに斎藤茂吉が同席した。『長崎年表〈昭和時代（1）〉』(http://www4.cncm.ne.jp/~makuramoto/01.nenpyo/1926-1934.s01.html)、本間貞夫「長崎蘭学と歴史教科書」、91ページ。(http://www.pref.nagasaki.jp/nichiran/ronbun/pdf/ronbun_06.pdf)

24) 『駅路通』、西東書房、明治44年。『大槻磐水』、博文館、大正10年。『献芹微衷』、大正14年（和綴）。『御肇国史』、開篇、主篇、結篇、附篇、文祥堂、昭和８年がある。『長崎大学経済学部所蔵　武藤文庫目録』、長崎大学付属図書館経済学部分館、1972年。

25) 石井研堂『明治事物起源５』、ちくま学芸文庫、361ページ。武藤の蔵書には、石井の以下の著書がある。石井研堂『少年工芸文庫第17編、　織物之巻』、博文館、明治36年。

26) 山下恒夫『石井研堂　－　庶民派エンサイクロペディストの小伝』、リブロポート、1986年、262－263ページ。

27) 武藤の「著作目録」は、前掲『在職30周年記念論文集』の巻末に17ページに渡って掲載されているほか、代表的な論文を集めた山田憲太郎編『海外文化と長崎』において12ページに渡り掲載されている。ちなみに後者の編者である山田憲太郎は香辛料の歴史･文化に関する研究者として知られる。武藤の薫陶を受けた一人であり、山田も内外の文献･資料を博捜するという研究スタイルを受け継いでいる。

28) 目録には武藤の著作は網羅されていないと思われる。例えば筆者は、和歌山県田辺市の南方熊楠顕彰館において、検索を通じて熊楠の所蔵していた資料の中から「著作目録」に未掲載の新聞記事を発見することができた。

29) 山田憲太郎によれば、武藤の研究は、時間の経過に従って次の三つの時期に分けてみることができるという。（1）明治40年から大正４年に海外留学から帰朝するまでの鉄道交通の経済的、法律的研究に専念した時期。（2）大正５年から昭和の初めまで。研究分野を拡大し、書誌学的研究を中心とする武藤独自の史学（ムトウイズム）が打ち立てられた時期。（3）昭和の初めから昭和17年(没年)までの武藤史学が軌道に乗り、進化拡大した時期。山田憲太郎「白百合の花」、『海外文化と長崎』、１－３ページ。

30) 小泉信三「篤学者耽学者武藤長蔵博士」、武藤長蔵『対外交通史論』、1943年、１－８ページ。

31) 「篤学者耽学者武藤長蔵博士」、３ページ。『海外文化と長崎』、「序」、１ページにも引用。

32) 「コリント人への第１の手紙」第13章「いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛とこの三つである」、『新約聖書』、1954年改訳、日本聖書協会。

33) 武藤と内村に関しては、寺崎勇夫「跋」、６－８ページ、姫野順一「武藤長蔵の人と学説」、28ページ。

34) 洞富雄「書評　武藤長蔵『日英交通史之研究』」、『社会経済史学』、第12巻第５号、95－98ページ。

35) 『商業と経済』第２号、大正11年。『海外文化と長崎』所収。

36) 「銀行なる名辞の由来に就て」（全11回）、『国民経済雑誌』、第24巻第１号～第25巻第６号、大正７年。「再び銀行なる名辞の由来に就て」（全５回）、『国民経済雑誌』、第27巻第１号～第28巻第１号、大正８～９年。この連載はあまりの長編だったので、『国民経済雑誌』から途中打ち切りが要請されたのだという。立脇和夫「武藤長蔵先生の学問への情熱」、『瓊林』、第67号、1985年、16ページ。

37) 『商業と経済』、第８巻第２号。『対外交通史論』所収。

38) 古賀十二郎は、ここにある「大目」はもしかしたら「青目」ではなかったかと推測したそうだが、武藤もそれに同調している。

39) 『経済論集』（アダム・スミス記念号）、大正13年。『海外文化と長崎』所収。

40) 『長崎談叢』、第13号、昭和８年。

41) 山田憲太郎「白百合の花」、３ページ。武藤の学風に関しては、以下も参照。野村兼太郎「武藤先生のことども」、『社会経済史学』第12巻第５号、81－84ページ。

42) 経済学に限定すれば、武藤の学風は「歴史学派」の世界に近いといえるだろう。例えば、姫野順一「武藤長蔵の人と学説」、24－25,27ページを参照。歴史学派であれば、具体的な史実を明らかにしていき、その延長線上で発展段階説のような総括・一般化が試みられることが多いので、「個から全体へ」という流れを重視する、以下本論で注目する帰納法的な発想法とも合致する。

43) ヨーロッパでも、諸学に通じ、蔵書を通じてその後の文化科学の発展に大いに寄与したアビ・ヴァールブルク（ウォーバーグ）が登場したのが、まさに20世紀初頭であった。ヴァールブルクに関しては、さしあたり以下を参照。松枝到編『ヴァールブルク学派　－　文化科学の革新』、平凡社、1998年。

44) 鹿野政直『近代日本の民間学』、岩波新書、1983年。

45) 姫野は、学問の生成期に百科全書派のような性格の学派が登場するようであるとの

指摘を行なっている。姫野順一「武藤長蔵の人と学説」、27ページ。

46) 熊楠に関する最近の学術的な成果として、飯倉照平『南方熊楠』ミネルヴァ書房、2006年を挙げておく。漫画の題材としても取り上げられ（例えば、水木しげる『猫楠　－　南方熊楠の生涯』、角川文庫ソフィア、1996年。内田春菊、山村基毅『クマグスのミナカテルラ』、新潮文庫、1998年。)、日本の100人のうちの一人にもなった。『週間日本の100人』、第58号「南方熊楠」、デアゴスティーニ・ジャパン、2007年。

47) 『太陽』（平凡社）において熊楠の特集が組まれたのが、1990年であった。「特集　奇想天外な巨人南方熊楠」1990年11月号。

48) 彼の研究は、没後『全集』にまとめられた。乾元社版で全12巻（1951 ～ 1952年)、平凡社版で全10巻、別冊２巻（1971 ～ 1975年)。また、これに加えて日記、多くの書簡があり、論文に匹敵する内容を持つ書簡も多いという。

49) 熊楠の膨大な量に渡る業績と学問的な幅の広さは、平凡社版『全集』別冊第２巻に掲げられた「著作目録」から見て取ることができる。

50) 大林太良「解説」、金関丈夫（大林太良編）『新編木馬と石牛』、岩波文庫1996年、341ページ。

51) 大林太良「解説」、『新編木馬と石牛』、341－342ページ。金関の薫陶を受けた考古学、民族学者の國分直一が金関の人物像について語っているほか、金関の学問についてまとめている。國分直一「金関丈夫　―　人と学問」、安渓遊地ほか編『遠い空　－　國分直一、人と学問』、海鳥社、2006年。國分直一「金関丈夫　―　自然･人文にわたる博大な学問的体系」、『文化人類学群像３、日本編』、アカデミー出版会。

52) 森銑三「解説」、金関丈夫『文芸博物誌』、法政大学出版局、1978年、305ページ。

53) 井本英一「解説」、金関丈夫『お月さまいくつ』、法政大学出版局、1980年、408ページ。

54) 谷川健一「学問と文学の間　－　金関丈夫のこと」、『朝日新聞』、1978年８月14日。

55) 「わきくさ物語」、『生理学研究』、８－４、1931年。「アイヌの腋臭」、『生理学研究』、11－８、1934年。「匂ふ文学」、『台湾時報』、24－２。「てん足の効用」、『故人の匂ひ』、東都書籍、1943年。「台湾本島人洗骨の風俗」、『民族学研究』、３－４、1936年。永井昌文、山下茂雄共著「長崎県平戸獅子面出土の人骨」、『解剖学雑誌』、28－5･6,1953年。金関の著作一覧は、『お月さまいくつ』の巻末378－398ページを参照。

56) 『著作集』は全６巻、平凡社、1971－1972年。林における好奇心の横溢は、久野収との対談集『知のドラマトゥルギー』、平凡社選書、1984年（平凡社ライブラリー

版あり）からうかがうことができる。

57) 「アマチュアの領域」、『林達夫著作集４　批評の弁証法』、平凡社、1971年、(1939年初出)、69－72ページ。

58) 林は京都学派の哲学者の中において最もアカデミズムから遠い所に位置していたと指摘される。内藤俊人「精神のポリフォニー」、『現代思想』、1984年８月号、172ページ。

59) 林達夫「アマチュアの領域」、69－72ページ。

60) 今村仁司「ベンヤミンと林達夫」、『現代思想』、1984年８月号、133ページ。

61) 『林達夫著作集１芸術へのチチェローネ』、平凡社、1971年、300ページ。中川久定『林達夫評論集』、岩波文庫、1982年にも所収。

62) なお林達夫の歴史学は、精神の古層に切り込みを入れるアルケオロジーとしての側面を持ち、イコノロジーの世界へと広がりを見せるが、その問題まではここでは立ち入らない。

63) 例えば、白幡洋三郎「博物学」、鹿野政直ほか編『民間学辞典　事項編』、三省堂、1997年、84－85ページ。

64) 南方熊楠のブームもさることながら、筆者は荒俣宏の活躍が少なからぬ意味を持っているのではないかと考えている。

65) 例えば以下を参照。リン・バーバー（高山宏訳）『博物学の黄金時代』、国書刊行会、1995年。D. E. アレン（阿部治訳）『ナチュラリストの誕生　－　イギリス博物学の社会史』、平凡社、1990年。

66) ヴンダーカンマーについては、たとえば以下を参照。小宮正安『愉悦の蒐集　ヴンダーカンマーの謎』、集英社新書ビジュアル版、2007年。

67) 白幡洋三郎「博物学」、『民間学事典　事項編』、84－85ページ。

68) 例としてアレクサンダー・フォン・フンボルトの森羅万象に渡る観察・記録を上げることができよう。大野英二郎、荒木善太『新大陸赤道地方紀行　上中下』、17－18世紀大旅行記叢書【第Ⅱ期】、11、岩波書店、2001～2003年。また、フンボルトに関する近年の文献として以下がある。ダグラス・ボッティング（西川治、前田申人訳）『フンボルト　－　地球学の開祖』、東洋書林、2008年。

69) 荒俣宏『博物学の世紀』、ＮＨＫ市民大学1988年10～12月期、11－13,28ページ。「存在の大いなる連鎖」を明らかにするという、かつて博物学に課された使命も、それが「量」の増大を尊ぶ学問であるということを裏打ちしている。

70) ここで事例として用いた和名と学名は、以下に依拠する。中根猛彦監修日本甲虫学

会編『原色日本昆虫図鑑（上）・甲虫編』、保育社、1955年。

71）例えば、ミドリシジミ*Neozephyrus taxila japonicus* Murray、オオミドリシジミ*Favonius orientalis* Murray、エゾミドリシジミ*Favonius jezoensis* Matumuraなどのミドリシジミの仲間はオスとメスとでは翅の色合いがまったく異なる。オスが金属光沢の美しい緑色の翅を持つのに対してメスの翅は黒っぽくて地味である。和名と学名は、白水隆、黒子浩『標準原色図鑑全集１　蝶･蛾』、保育社、1966年による。

72）但し武藤において、博物学との対比が彼の学問的な特徴の検出に役立つとはいえ、彼の学問が体系化されていたとまではいえないであろう。事実の確定に精力が注がれたとはいえ、すでに指摘したように、その事実が全体のなかでどこにどのように位置づけられるのかということに関して、武藤はかなり無頓着であったからである。

73）鹿野政直『近代日本の民間学』、７ページ。以下、民間学に関しては、主にこの著作を参照している。

74）鹿野政直『近代日本の民間学』、41－44ページ。

75）「クリスマス及クリスマス樹の由来」、『学友会雑誌』、第67号、1932年。

76）ここで挙げた諸学者の簡単なプロフィールについては、以下を参照。鹿野政直ほか編『民間学事典　人物編』、三省堂、1997年。

77）金関は、台湾総督府医学専門学校教授を経て1936年に台北帝大教授、また戦後1947年以降は中華民国国立台湾大学教授を歴任し、1949年に佐世保経由で帰国した。「金関丈夫博士年譜」、金関丈夫博士古稀記念委員会編『日本民族と南方文化』、平凡社、1968年、959－965ページ。

78）鵠沼に関する文献として、以下を参照。小山文雄編著『個性きらめく　－　藤沢近代の文士たち』、藤沢市教育委員会、1990年。高三啓輔『鵠沼・東屋旅館物語』、博文館新社、1997年。

79）上記注76）を参照。

80）例えば、「商業教育及び商業学科の史的回顧と長崎」、『長崎高商創立二十周年記念講演及び論文集』、1926年。また『海外文化と長崎』にも所収。

81）但し、その理由としては、武藤の名が全国的にはそれほど知られていないということも挙げられるだろう。

82）長蔵の兄で歴史学者であった武藤長平は、長蔵の歴史に対する興味を助長する上で少なからぬ役割を演じたのではないかと推測される。（例えば、寺崎勇夫「跋」、５ページ、馬場誠「武藤先生を憶ふ」、88ページ。）長平には、筆者未見であるが、『西

南文運史論』（大正15年）という著書があることが知られている。ところでこの長平を介すると、長蔵の民間学者を含む知のネットワークは格段に広がりを見せる。なぜなら長平の著書『西南文運史論』は、民俗学や考古学といった民間学的色彩の強い本を多く出版していた岡書院から刊行され、しかも同書を、かの学問道楽界の大御所ともいえる内田魯庵が詳しく取り上げているというからである。（『内田魯庵全集』、補巻３、ゆまに書房(筆者未見)、山口昌男『内田魯庵山脈』、529ページ。）岡書院は、道楽として学問を楽しんだ民間学者的研究者の著作を多く刊行していたほか、『ドルメン』という人類学や民俗学、考古学を中心とした学問を楽しむ大変ユニークな雑誌を出していた。岡書院の周辺にいた主要な学者としては、南方熊楠、金関丈夫、浜田耕作、柳田國男、岡正雄など、そうそうたるメンバーを挙げることができる。（但し、残念ながら武藤長蔵本人と岡書院との接点は見つかっていない。）さらに内田魯庵を介しては、大平の逸民の知的サークルである「集古会」を通じて林若樹、大槻如電、淡島寒月などといった在野の知のネットワークの王道にリンクしていくのである。（山口昌男『内田魯庵山脈』、『敗者の精神史』参照。岡書院に関しては、岡茂雄『本屋風情』、中公文庫、改版、2008年。）長蔵自身がここまで広範な関係を築いていたとはいえないが、兄の長平を媒介項とすることにより、間接的ながら知のネットワークが一挙に広がりを見せる点がまことに興味深い。

83）武藤がこの役割を、はたして自覚していたか否かの検証は、今後の課題として残される。

84）鹿野政直『近代日本の民間学』、43－44ページ。

85）寺崎勇夫「跋」、１－２ページ。

86）江頭厳「武藤長蔵先生の思い出」、『瓊林』、第62号、1983年、45－46ページ。

87）江頭厳「武藤長蔵先生の思い出　最終回」、『瓊林』、第73号、1988年、22－23ページ。

88）寺崎勇夫「跋」、12－13ページ。

89）寺崎勇夫「跋」、１ページ。

90）江頭厳「武藤長蔵先生の思い出　最終回」、22－23ページ。

91）立脇和夫「武藤長蔵先生の学問への情熱」、16ページ。

92）江頭厳「武藤長蔵先生の思い出　最終回」、23ページ。

〔付記〕

本稿脱稿後、高松大学発達科学部講師古田茂孝氏より、ウィリアム・アーサー・ワードによる次の言葉があることを教示いただいた。

凡庸な教師はただ喋る。
良い教師は説明する。
優れた教師は自らやってみせる。
偉大な教師は心に火を点す。

記して感謝したい。この格言については様々な訳がなされているようであるが、原語は以下のとおり。

The mediocre teacher tells.
The good teacher explains.
The superior teacher demonstrates.
The great teacher inspires.
William Arthur Ward

なお、本稿は平成20年度長崎県立大学学長裁量教育研究費(研究テーマ「長崎高商教授武藤長蔵の学問世界」)による研究成果である。